

「最期を生きる・あるホスピスケアの試み」を見て

HP「雑学 BN」の「TV 番組等紹介コーナー」で案内していたので、「東京・山谷 最期を生きる・あるホスピスケアの試み～人生を生き直す場所～」をご覧になった方もおられると思う。

この在宅ホスピスケア対応型集合住宅には、日本の高度経済成長を支えた家族等とも疎遠になった労働者が、高齢になり医療的ケアを必要とするようになって入居してくる。

このホスピスケアでは、開設以来6年間で80人の方を看取ったという。

この在宅ホスピスケア対応型集合住宅の様子については、先に当 HP の「ルポの書：『「大いなる看取り』』を読んで（HP「雑学 BN」の書籍等読後感関係（V）、2008.07.13.：参照）」で触れたことがある。

入居者それぞれの人生については、先の書籍「大いなる看取り～ 山谷のホスピスで生きる人びと～」の方が詳しく触れられていたが、今回の TV 番組で一番印象に残ったのは、次の一人の入居者の最期のシーンであった。

日頃からの訪問医も、敢えて入院を勧めず、このホスピスでの看取りを進言する。

この方の最期が近いので、スタッフ、ボランティアの方が入れ替わり立ち替わり側に寄り添い、優しく声をかけながら看取り続ける。

施設長の奥さんでもある主任看護師もベッドに寄り添い、手を握り、顔を撫で、体をさすり、「もうすぐ天国に行けるよ」、「楽しかったね」、「ありがとうね」と、笑顔さえ浮かべながら声をかける。

看取りの80%が病院であるとのデータからも分かるように、一般的には家族は、恐らく本人の意に関係なく、最期が近いと分かっているにもかかわらず入院させ、たくさんの管でのスパゲティ状態の中で看取るのが、今の日本の家族、医療現場の実状ではないだろうか。

この在宅ホスピスケア対応型集合住宅の活動は、番組のタイトルにあるように、正に、最期を生きる「試み」であり、あるべき看取りの「試み」でもあると思う。

ホスピスケアに限らず、「生きる→人間関係（係わり合い）」とは、「not doing, but being.」だと、番組を見て改めてつくづく思った。